

道元禪師の疑団についての一考察

——本証妙修に関連して——

新野 光亮

道元禪師の疑団は、周知の如く「本来本法性、天然自性身ナラバ、三世ノ諸仏為甚麼更発心修三行三菩提ノ道」というものである。この疑団は、禪師の伝記資料の中で、最初に『三祖行業記』、次に『古写本建誓記』等に記載されているが、それ以前の『伝光録』中には、単に公胤僧正に「宗の大事を尋ぬ」と記されているのみであるから、『行業記』等にある疑団の通りであったかどうか多少疑わしいが、禪師が叡山修行中に自己の求めている真実の仏法が得られず、叡山の修學中に疑問をいだき、山を下りて公胤僧正に尋ねられたことは諸伝の伝へるところである。

また、この疑団について直接禪師の著述の中に記されていないことから、伝記作者の創作ではないかと考えられないこともないが、これを否定する有力な資料が存在しない限り『行業記』等の記するところに従っておきたい。ともあれ叡山修行において疑問をいだいたことは明確である。

疑団の内容は、本来人が仏と寸分変らぬものであるならば、何故更にあらためて発心修行しなければならないのかというものであり、真剣に仏道を求める修行者程この疑問は大きく、仏教では『大般涅槃經』の中にもある如く、古くから問題とされている。これは

また、日本天台本覚法門に対する疑問であり、修と証との問題でもあるので、禪師の疑団を本証妙修に関連して考察して行きたい。

なお『永平紀年録』によれば、建仁寺を訪ねた折、榮西に疑団を問うたところ、榮西は「三世諸仏不知有、狸奴白牯却知有」と答えたと言われるが、最近、榮西と禪師との相見問題が否定されている論文もあるので、一考を要する。

禪師の本証妙修の思想は、疑団の解決にあたつて叡山を捨て、明全と共に入宋し、如浄の炉鞴の下で解決されたのであるから、叡山の日本天台本覚法門は、その踏台となり得てもその母胎とは云い難いと言うのが、宗門の伝統的な見方であるが、従来から一般には本証妙修の思想的根拠や母胎を何処に求めるかについて、一、如浄会下より承持せる中国禪宗の延長、二、禪師独自の問題意識をふまえた日本的展開であるという二つの見方があり、各々先覚者の秀れた論文がある。

さて、このような疑団が何故おこつたかということについて、禪師の上山された当時の叡山の現状について見ると、建暦二年（一二一一）禪師十三才の春、叔父の良観法印（後の圓成寺長史行意）を訪ね、横川の般若谷千光房に入られた時の天台座主は慈円僧正であり、翌年、剃髪受戒の師は慈円の後に天台座主となった公円僧正であった。公円は慈円の伝法灌頂の弟子で、台密三昧流の嫡流である。叡山は、もともと遮那と止観とを並置させる顕密兼習を宗としているが、平安中期以後ほとんど密教の事相中心となり、鎌倉時代は全く台密の全盛時代であった。中でも台密三昧流は、教相よりも事相が盛んで行持儀軌を中心とする密教色の強いものであった。

また、叡山は（建暦三年十月）清水寺の所屬問題に端を発して興

福寺との争いが興り、山門と寺門との争いは以前から絶え間がなく、僧兵が横暴をきわめ、僧界も俗権が支配し、天台本覚法門の絶対的一元論から、我々は本来仏であるから修行はいらないという自然主義の修証観がおこり、僧界の麁類ぶりは目に余るものがあった。加えて政変や社会的動乱から一般に末世的無常観、五濁惡世が現実として受けとめられた時代であつた。

こうした時代背景の中にあつても、禪師は『古写本建誓記』によると、十三才より十八才の六年間の叡山修學中に一切経を二遍読破し、真劍に天台円教に關しても研鑽されたことには相違ないが、右の様な叡山の貪愛名利の中には、外面的にも内面的にも禪師の心をいやし、真に求めているものを得ることができなかったといえよう。遂に如淨の下で身心脱落することによつて疑團は解決され、その後『弁道話』等にある如く本証妙修として示されているが、この様に凝結して示したのは、日本中国を通して禪宗史上禪師をもつて嚆矢とされている。

本証妙修に關して、入宋してから解決されるまでの過程は、原田弘道氏も論ずる如く、『典座教訓』に見える阿育王山の典座との二回にわたる問答から「文字と弁道」を、また真夏の昼下り吾をさらしていた老典座より「他はこれ我に非ず」と示され、『隨聞記』第三にある西川の僧との問答で「畢竟じて何の用ぞ」と示され、『宝慶記』には、本来本法性に関する問答などがあり、これらによつて禪師は單なる學問や思想ではなく、全身心を以つて眞實の文字、弁道、行持を体得されて行く様子がうかがえる。

それはまた、本証であるから修行は必要ないとする修証観ではなく、本証なるが故に修行が一段と強調されたものであつた。本証妙

修は、坐禪の時は坐禪きり、仏法の為に仏法を修行するもので、本証にうらうちされた妙修であるから修の当処に証の全体が隠ることなく具わつてゐるから修証一等であり、初心の修行がそのまゝ仏の修行と少しも変らないのである。

即ち、凡夫から修行して仏になる始覺門的修証観ではなく、仏からの修行であるから本覺門的修証観であり、從因向果ではなく從果向因の立場である。

禪師においては、同じく本覺門に立ちながらも、ともすれば本来仏であるから修行はいらないとする日本天台本覺門に對し、本来仏であるからなお一層修行は仏祖の妙行として無窮なる妙修が展開されるものである。それは、本証にうらうちされた妙修、本証ずからの妙修として、我々の日常のすべての生活實踐が仏祖の妙行として重視され、仏祖の行持は道環して間隙がないのである。更に発心について云うならば、一般に発心は一回発せば良いのであるが、禪師は一発心を百千万発するなりとして、どこまでも無限に発心し修して止まないのである。

以上の考察によつて、無常観に基く叡山修學時の疑團が元になり契機となつて、遂に如淨の下で身心脱落し、本証妙修として解決されたのである。しかし、禪師の本証妙修と日本天台本覺法門とは直接には結びつかず、むしろ自然主義修証観に流れた本覺門や、理は本覺門とするも事は始覺門の修証観である宋朝禪をも批判し、更にそれを超克しているのである。

本証妙修は、証上の修たる只管打坐の妙行を中心とし、日日のすべての生活實踐が仏祖の行持として無窮に行われ、本証よりも妙修の方に力点がみられる。(註略)